

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり。わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも、神通方便をもって、まず有縁を度すべきなりと云々

南第3組 光福寺住職

金石 晃陽

text by Kouyou Kanaishi

## 第5章 「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」

宗祖の著作には、「父母」の文字が数多く出てくる。釈迦弥陀を「慈悲の父母」と仰ぎ、聖徳太子を「父のごとく、母のごとく」と慕われている。また、徳号を「慈父」、光明を「悲母」としても確かめられている。

廣瀬杲先生は、釈尊の出家の動機は、「生老病死」の四苦からの解脱にあったように、法然上人は、八苦の一つである「怨憎会苦」、宗祖は、「愛別離苦」からの解放ということが、出家・求道の動機であると教えて頂いたことがある。

幼くして死別した父母。その現実には宗祖を、どれ程の失望と悲惨さと孤独の淵に落としたことであろうか。宗祖にとって、亡き父母を思わない日は、一日もなかったのかもしれない。多くのご門徒にとって、身近な方の死こそが、聞法の場に身を運ばせたように。

しかし、宗祖は、父母の追善供養のために、一辺も念仏申したことはないと言断する。

一見、冷淡にもみえる言葉であるが、宗祖にとっての「父母の孝養」が具体的に語られてあるのが、この「第五章」といえよう。

もし、亡き父母のために、追善供養として念仏するというならば、亡き父母をどのような存在として、見ていることになるのであろう。それはきっと、亡き父母は、暗い迷いの世界（六道四生のあいだ、いずれの業苦）にしずみ、淋しく辛く苦しい思いをしているに違いない。だからこそ、自分の力で善行に励み、その自分の善行としての念仏を回向してこそ、父母をたすけることができ

る。それこそが、追善供養であると考えからであろう。

しかし、父母の孝養とは、今でいうなら、親孝行ということであろう。では、親孝行というのは何かというと、親に心配かけないのが、一番の親孝行である。親というのは、子が離れていても、傍にいても、どのような生き方をしているも心配でならないものである。

まして、亡き親への孝養とは、亡き親に心配をかけないことであろう。亡き親は、何故この私を心配してくださるのか。絶対たすからない身は他ではない、この私だからである。迷いの世界（六道四生のあいだ、いずれの業苦）に常没・常流転しながらも、そのことに全く無自覚であるどころか、気づこうともしない。それ故に、その迷いの世界から出離の縁さえ求めようともしない。それが、この私に他ならないからである。

「私がたすかることが、祖先がたすかることである」。曾我量深先生の言葉である。私がたすからない限り、亡き父母がたすかることはない。たすかるとはどうか。この私こそが、「六道四生のあいだ、いずれの業苦」に沈んで、わが行・わが善にては、出離の縁の絶え果てた「罪悪深重煩惱熾盛の衆生」（第一章）、「いずれの行もおよびがたき身」「地獄一定」（第二章）、「煩惱具足のわれら」（第三章）であることを言い当てて下さる、釈迦の経言との出遇い（発遣）によって、弥陀の大悲心（招喚）に目覚める以外にはない（ただ自力をすてて）。何よりも、たすからねばならないのは、この私である。それを『歎異抄』は、「いそぎ浄土のさとりをひらきなば」と語られるのであろう。

今年父が亡くなって、十七年になる。父は今、どこにいるのか。浄土にはいない。

（まず有縁を度すべきなり）、絶対たすからない（六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめる）この私こそが、たすかってほしいと、六道四生を生きるしかない私にまできて、「本願に目覚め、念仏申す身になってほしい」と、父は、呼びかけ続けている。